

新シリーズ

「地域の福祉力 最前線」

— 出会いの場づくりから始めませんか —

地域の福祉力という言葉を知っていますか？
地域には、「生活のしづらさ」に気づき、共感し、
解決へ向けてみんなで取り組む力が必要です。

その力を「地域の福祉力」と呼びます。

この「地域の福祉力」に注目して、県内の地域福祉の
“いま”をお伝えする新シリーズを始めます。

「地域の福祉力」は、ご近所の底力と言われたりもしますが、その力が生まれるには何らかの“きっかけ”が必要となります。そこに、つながりが薄れつつある時代だからこそその悩みがあります。昔ながらのお祭りや共同作業などが地域を問わず少なくなり、住民が出会い、相談をしたり、話し合ったりする“きっかけ”が失われているのです。社会福祉協議会では、新たなきっかけとして「出会いの場」づくりを提唱しています。

今回は、ある山間部のできごとを通して
「出会いの場」について考えます。

お茶でも入れて
集まろうか？



これまで、山間部は、高齢化してはいるものの強い絆が残っており、暮らしの中には自然なかたちで支え合いが存在していました。今もその支え合いは残っているものの、「助けが必要らしいよ」という情報が行き交う「出会いの場」が徐々に減ってきています。その結果、暮らしのこまり事をみんなで共有して、何かを始める“きっかけ”がつかめずにいる地域も多いのではないのでしょうか。

県内でサロン活動等に早くから取り組んだ地域が比較的新興住宅地に多いのは、地縁が少ない地域ならではの「出会いの場」の大切さに気づいていたことの表れかもしれません。

地域を問わず見直されている「出会いの場」、みなさんの地域でも集まって話をするところから始めませんか？

このシリーズは、県内の「地域の福祉力」あふれる事例を紹介していきます。

一ヶ月分のおしゃべり

「ああ、楽しかった…。一ヶ月分もしゃべったわあ。」

山間部でひとり暮らしをするお年寄りの話を聞こうと集まってもらった懇談会。ひとしきり話してお開きの時間が近づいた頃、あるおばあちゃんが何度もつぶやいた。

山仕事をしてきた人が暮らすその集落は、斜面に家々が点在するが、空き家も多くなった。斜面の上の方にあるポツンと離れて建つ家で暮らす毎日、きつい坂道がご近所さんとの気軽な行き来を阻んでいるという。

誰かと何気ない会話をする、ただそれだけのことを毎日どれほど望んでいたのか、どれほど楽しいことなのか、おばあちゃんの一言から気づかされる。

できるかぎり暮らし続けたい

不便なこともたくさんあるが、村への愛着は深い。冬場は、村外に暮らす子どもの家に行く人もいるが、「町中は、車が多くて散歩もままならない」「空気と景色がきれいなこの村がホッとする」という。

ひとり暮らしを心配する家族や周囲に迷惑はかけたくないけれど、「一日でも長く、できるかぎりこの村で暮らしたい」「気心知れた近所の人と気ままに暮らしていきたい」そんな本音がちらほら出てくる。

近所づきあいの状況

※H21 奈良県民のくらしに関する調査より

●近所づきあいの程度

県全体では6割程度(58.6%)の世帯が「生活面で協力しあっている人がいる」(23.2%)か「日常的に立ち話をする人がいる」(35.5%)

●世帯類型別では

「生活面で協力～日常的な立ち話」をする割合が高いのは3世代世帯(68.3%)と高齢夫婦のみ世帯(64.3%)
割合が低いのは高齢以外の単独世帯(27.1%)
1人親と19歳以下の子の世帯(44.1%)など

●世帯主の年齢別では

世帯主が高年代の世帯ほど近所づきあいの程度が高くなる傾向であるが、世帯主が20歳代以下の世帯では「生活面で協力～日常的な立ち話」をする割合は3割未満(26.9%)と極めて低い。

●地域別では

県東・南部の各郡部で特に近所づきあいの程度が高く「生活面で協力～日常的な立ち話」をする割合は 吉野郡78.1%
高市郡77.1% 山辺・宇陀郡76.4%

地域活動・地域の催し物への参加状況

※H21 奈良県民のくらしに関する調査より

県全体では「高齢者・障害者関連」の参加割合が2割未満(17.1%)と特に低調
その他の3分野では3～4割程度

●最近1年間で地域活動・地域の催し物に参加したことがある世帯の割合 (n=9,127世帯)

防犯防災訓練・教室、救命救急講習、自主防犯防災パトロール、子どもの見守り活動、夜警、セミナーなど

参加
35.9%

PTA・子供会の活動、地域主催の体育祭・文化祭、地域の学校主催の運動会・バザー、セミナーなど

参加
45.4%

高齢者見回り活動、認知症サポーター活動、高齢者・障害者へのボランティア、福祉団体等主催の催し物、セミナーなど

参加
17.1%

まちづくり・まちおこし、自然環境保護、地域伝統文化・行事、スポーツ・文化振興、健康医療、観光振興、人権平和など関連

参加
35.9%

ひとり暮らしの不安

懇談会では、「一日中誰とも話さないことが結構ある」「郵便局の配達員さんが、玄関先で声をかけてくれると安心する」「急に具合が悪くなったらどうなるんやろか」など、暮らしの不安が語られていく。

不安だけでなく、既に多くのこまり事が起こっている。「バス停まで山を下りると1時間以上かかる」「病院に行く時は、近所の人が仕事に行く車に乗せてもらっている」「買い物は、宅配サービスを使っているけど、自分の目で見て新鮮なもんを買えたらなあ…」「小さな畑が楽しみ。ちょっと入院したら雑草が繁って、斜面もきつくて元に戻すのが大変や。もう畑やめとこうかなあ」「深い溝に落ちた人を見つけたが、お互い年をとっていて助けられなかった」

こんなにひとりもんがおったんやなあ

こんなふうが集まって始めて、「ひとり暮らしの年寄りがこんなにおるんやなあ…」と驚く人もいる。最近では、区人足(草刈りなどの集落の共同作業)やお餅つきも遠慮するようになって寄り合える機会が減ったから、みんなの近況はあまり知らなかったとも。昔から地域のことは何でも知っているお年寄りだが、村の高齢化はみんなの想像以上のスピードで進んでいる。

自分の不安が、みんなの不安でもあることに気づくことは、「何かを始めよう」というきっかけにもなる。

「今日は、ぎょうさんしゃべって楽しかったわあ」「また集まったらええわなあ」「次は自分らでお茶でも入れて、集まろうか?」「社協から配ってくれるお弁当、みんなで集会所に持ってきて一緒にたべようか?」山間部のひとり暮らしは、不安も多い。でも、気心知れた人たちと暮らし続けたいから、お互いに支え合ってがんばりたい。この地域の福祉力は、これから動きだそうとしている。

世帯数の減少、高齢化等で困難になってきた地域の共同作業

※H22 奈良県の過疎地域における集落実態調査より

これらの項目は65歳以上が50%以上を占める集落で顕著である

●継続が困難になってきた共同作業 (%) (n=207)

